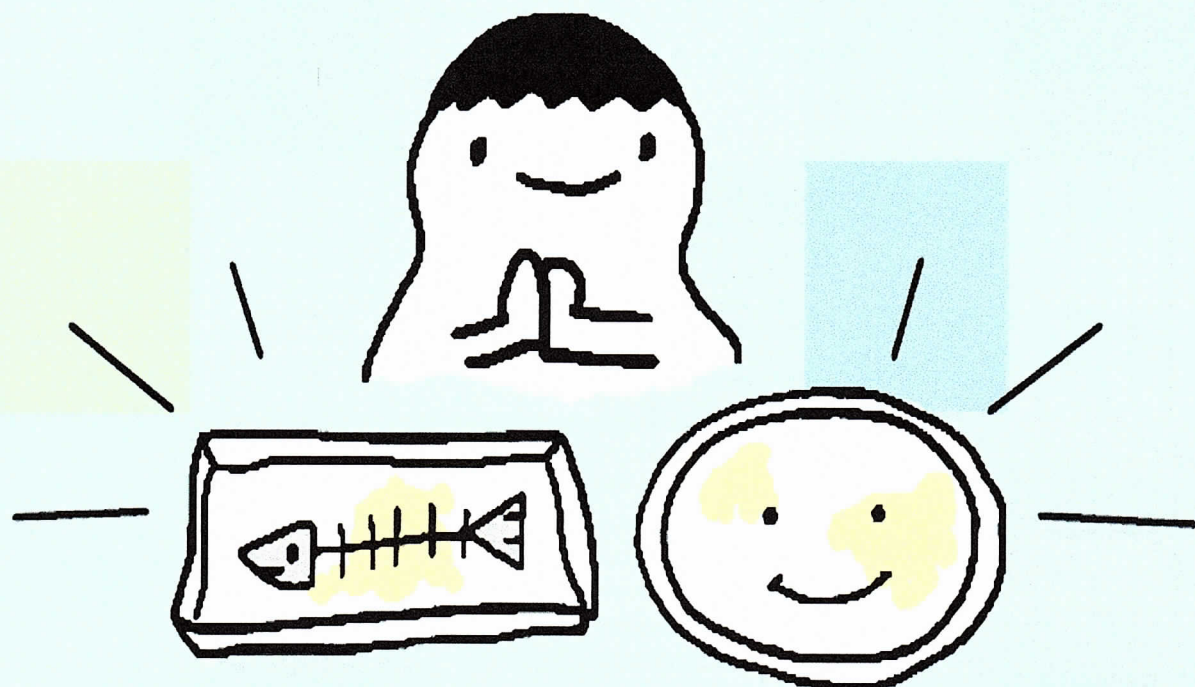


NPO法人地球こどもクラブ主催

ぼくたちの地球を守ろう

第27回 小学生 中学生 作文コンクール

第21回 小学生 中学生 ポスターコンクール



テーマ

「もったいない」
を実行しよう!

入賞作品集

内閣総理大臣賞

タイトル：【江戸時代に学ぶ「もったいない精神」】

静岡県 中学校2年生 水野 頼子

石油がなくなってゴミとガスで覆われた地球を想像出来るだろうか。小さい頃の私は誰かに聞いた覚えがある。「地球に人が住めなくなったらどうするの。」

誰かこう言った。

「そうなる前に科学者が何とかしてくれる。」

と。でも、今の地球環境を考えたら、そうは思えない。地球を科学者が何とかしてくれるのなら、私たちの生活から資源が減ってしまうことも、ゴミが出てしまうこともないだろう。人間だけでなく他の動植物たちも、もっと快適に暮らせるだろう。あのとき誰かの言ったことは信じてはいけなと、今確信した。環境問題を他人事にして、他人に頼ることは出来ないのだ。自分に何が出来るのかを考えなければならない。

「もったいない」という言葉を聞いて、家庭科の教科書に載っていた江戸時代の循環型社会の構築方法を思い出した。江戸時代の日本は貿易をしていないため、すべてを国内生産しなければならなかった。そこで、太陽の恵みで成長するわらや竹を使って生活道具を作ったのだ。多くの時間と労力をかけ、生産量は当然少なく、「もの」や資源はとても貴重だった。「もの」はいつかは必ず使えなくなるが、修理できるものなら何度も何度も修理を重ねる。本当に使えなくなったら燃料にして燃やすが、その時に出来る灰もまた有効利用された。灰は染め物や酒造りに必要な材料であり、もちろん肥料にもなったのである。

江戸時代に行われていたことはこれだけではないだろうが、人々は今では簡単に手に入るものや、簡単にゴミとして扱われるものをとても大切にしていたと言える。そして、ものを長く使うためにはどうするか、ものが使えなくなったらどうするかを常に考えていたことが分かる。江戸時代にはきっと、「もったいない精神」が根付いていたのだろう。

私の家にも「もったいない精神」は少しある。例えば、汚くなったタオルや穴の空いた靴下を掃除する時に使ったり、お風呂に家族全員が連続して入ったり、買い物にマイバッグを持参したり、きちんとリサイクルしたりするなど。「なんだ、小さなことでも意外とたくさんあるじゃん」と感じだ。

私は、「もったいない」を考え直して、今起きている大量生産、大量消費の時代に「もったいない精神」を日本文化になるくらい増やしていきたいと思った。人間の生活の豊かさを求めすぎた「便利すぎる世の中」はいらない。私たちの生活で一番もったいないのは、便利すぎるが故に頭を使って考えていないことだと、私は思った。

出掛けようと思って玄関に行ったら、お父さんが買ってきた腐葉土が置いてあった。後で、生ゴミのたい肥の作り方を調べて教えてあげよう。それで、一袋分のもったいないが減るのだから。

外務大臣賞：小学生部門

タイトル：【ちょっとした心がけ】

東京都 5年生 三國 礼華

「短くなったからすーてよっと。」

「ちょっとまって！銀色のキャップを付ければまだ使えるよ。」

私は一年生のころ、短くなってしまったえん筆を箱の中に集めていた。字をたくさん書き、箱の中のえん筆はどんどんたまっていった。あまりにも多くなったので、すてようとした時のことだった。どこからともなく声が聞こえてきたのだった。

そのころ、「もったいないばあさん」という絵本に出会った。もったいないばあさんは、短くなった色えん筆を束ねて、にじを書いたり、ミカンの皮を使ってミカン風呂にしたりする。その他にも、もったいないばあさんは、使えなくなったものを利用して、次々に新しいことを始める。

その絵本との出会いで、もうけずれなくなったえん筆もなかなかすてられなくなった。まだけずれるえん筆を探してはけずり、それに銀色のキャップを付けて使っていた。それが、私が「もったいない」ということを初めて経験した出来事だった。

四年生の社会科のじゅ業で、ゴミについて学習した。ゴミについてよりくわしく知るために、「うめ立て地」の見学に行き、「3R」について知った。

その3Rとは、三つのRのことだ。一つ目は、リデュース。ゴミになるものをへらすということだ。すききらいなく、何でも食べることもその一つだ。二つ目はリユース。使ったものをもう一度使うこと。お下がりの服やフリーマーケットに協力することもその一つだ。三つ目は、リサイクル。もう一度、資源として活かすこと。資源回収に協力したり、再生物が使用されているものを使うのもその一つだ。

四年生で「3R」を学び、もったいないばあさんが教えてくれた、「もったいない」の「大切さ」が初めてつながった。

学校でも様々な取り組みをしている。その中で私が特に意識していることは、ペットボトルキャップとプルタブだ。ペットボトルキャップは、八百個でポリオワクチン一人分になる。これで、世界の子どもの命を救える。また、プルタブは、約八百キログラムで車イス一台分になる。それを知ってから、私は家でこつこつ集めている。ビニールがいっぱいになると、いつも学校へ持っていく。これは、ゴミをへらすというリデュースだけでなく、役にも立つ。ちょっとした心がけに気づく事で、世界の子どもやふくしの役に立つことが分かった。

だれでも、ほんの少しの心がけでゴミが減らせる。みんながそうした意識を持って協力すれば、大きな力になる。そして、世界や、地球の役に立つ。

カバンの中でペットボトルキャップが音をたてた。

外務大臣賞：中学生部門

タイトル：【もったいないでつなげる命】

埼玉県 中学校1年生 宮坂 愛

世界の人口の約八億人。この数を見て、あなたはどんなことを思い浮かべますか？この八億人という数は今、食糧不足の人たちの数です。こんなにも多くの人が食糧不足になっているのに、私たちは平気で残してよいのでしょうか。

まず、私たちに出来ることは何だろうと考えました。そして、残さず食べる事だと思いました。とても単純な事だと思うかもしれませんが、大切なことなのです。作ってくれた人に感謝をします。多くの命をいただいていること、世界には、食べ物を食べたくても食べられない人が居ることを理解し、食べることが出来る。お腹いっぱいになれることに私は、感謝しなくてはいけないと思っています。

そして、他に栄養不足や飢えなどによる病気で、毎日三万人、年間1千万人以上の人が亡くなっていると言われています。食べ残しを減らすことで、もったいないを少しでも減らすことが出来ると思います。

また、食べ物を食べる上で忘れてはいけないこと、それは、命をつなぐ、ということです。食べてしまうだけではなく、食べ物を育て、育んでいく、そうして命をつないで行くことで私たちは生きています。

食糧は、食べ尽くすと無くなります。種、そして苗へと次につなぐことで、生命の営みは続いていくことが出来るからです。私たちにとって、その種は、命そのものだと思います。つながっていく命。つなげていく命。そのことを、私たちは忘れてはいけないと思います。

日本は世界から、たくさん食べ物を輸入しています。日本には、四十パーセントしか食糧自給率がありません。日本は豊かな国ですが、輸出している国は、豊ではない国もふくまれています。自分の食事は、世界につながっている。なので、食べ残しはよくないと思います。そして、食べ物を届けてくれる人たちへの感謝の心も大切だと思います。もったいないを考え、行動していけば、地球の未来は、さらに明るく、輝いていくと思います。少しでも、世界をよくしていくために、貢献していく人になりたいです。

文部科学大臣賞：小学生部門

タイトル：【最後まで大切に使いたい】

千葉県 小学校5年生 佐藤 妃蘭

“もったいない”とは、むだづかいしてはいけないことだと考えます。
お父さんから、「よくばるな。食べられる分だけにするんだぞ。」と注意されます。

食べ残したものの、飲み残したものは、次の日に食べたり、飲んだりしています。
ある日、おばあちゃんが、「ひいおばあちゃんが“もったいない”からと言って残したものを肥料にして、野菜などを作っていたよ」と話してくれたことがありました。そんな時、“リユース”について社会の時間に学びました。

“リユース”とは、自分が使わなくなったものを必要とする人に利用してもらうことだということが分かりました。私の家では、使わないものはお店に持っていったり、友達と交かんしたりしています。

まだ使えるものを捨てていません。

私は、ペットボトルの水を飲み終わったら、ロケット、花びん、物入れ、貯金箱を作りました。あなをあけてシャワーとして使ったり、お花に水をあげるのに使ったり、みぞそうじするときに使っています。

自分で作った物を使ってみると、うれしいですよ。

みなさんもぜひ、工夫して、自分しか出来ないものを作ってみませんか。

私は、三年生から書道教室に通っています。お兄さんや、お姉さん達は、ペットボトルに残った水は、すみをうすめる時に使っています。失敗した半紙は、空いている所に、くり返し練習する用紙として使っています。また、半紙の上と下を交かんして最後までむだにしないで書くなどの工夫をしています。

“もったいない”と覚えることはありますか。と先生から言われるまで分からないままやっていたのですが、お兄さん、お姉さんのように自分も空いている部分を利用して、上手になりたいと思います。学校で紙、えんぴつ、消しゴムを最後まで使わずに、置いたままにしていると、先生に「むだに使っているのはだれですか。」と注意を受けることがあります。

まだ使えるのに、「消しゴム買って」とおばあちゃんに言えばいくらでも買ってくれますが、使わずにごろごろしている自分の机にある消しゴムを見て“もったいない”と気づきました。

今あるものを工夫して使い、むだのない生活ができたらいいなあと反省しながら生活したいと思います。

私ができることは、「最後まで物を大切に使う」事を意識し、行動することです。

考えながら生活することで、今よりむだをへらしたいと思います。

文部科学大臣賞：中学生部門

タイトル：【これから私たちにできること】

埼玉県 中学校3年生 宮坂 華恵

アフリカ人女性として初のノーベル賞を受賞したケニアのワンガリ・マータイさんは、「もったいない」という日本語を知り、「ものを大切にし、心豊かに生きてきた日本人の心・生き方そのものだ」と感激されました。そして、「この言葉を考えることで、大量生産・消費型のライフスタイルを変革できる」と考えて「もったいないを世界に」と提唱されました。

「地球環境保全」というと、あまりにおおきな事で、自分が関われる事だろうかと思ってしまう。また、「大切なことは分かるけれど、面倒な事はしたくない」と思う人もいるでしょう。「もったいない」という日本人でさえ忘れかけているようなこの言葉をもう一度私たちが意識していくことで、環境問題やゴミ問題などにごく自然に関わって行くことが出来るのではないのでしょうか。

私は小さい頃から、食べ物を粗末にすると「もったいないお化けが出るよ」とよく母から言われていました。私たちの世代は、お米を最後の一粒まで残さずに食べることは「恥ずかしい」事だと考えている人も多いように感じますが、私はキレイに食べきることは美しい食べ方だと思います。そして、食べ物をありがたくいただき、残したら「もったいない」と考えることは、すべての環境問題の出発点であると思います。

日本は飽食の時代で、お金さえ出せばどんな食べ物でも手に入り、食べることに困ることはありません。困るところか日本では、年間二千万トンもの食品廃棄物が飲食店や、コンビニ、家庭などから放出されています。それなのに世界には人災や自然災害の被災者のおよそ五千万人が深刻な飢餓の脅威にさらされています。その主な原因は栄養失調です。飢えのために五秒に一人のペースで子どもが亡くなっています。日本と世界の一部の人との違いがここまであるのかと思うと、胸が苦しくなります。そして、何か少しでも自分に出来ることはないかと強く感じました。

私は、日本で捨てている食料をそうした人々に回すことが出来れば、どんなに助かるだろうと思います。野菜などの調理くずでも、皮や芯、外側の葉の部分などは調理の仕方によって、食べられる所が沢山あると思います。これらを工夫してむだなく食べればもっと食品廃棄物は食料として使えるのではないのでしょうか。また、食べ物を捨てる前にあるいは店で食べきれないほどのメニューを注文する前に、もう一度「もったいない」という言葉を意識していけたらいいと思います。

小さなことかもしれませんが、たくさんの人が積み重ねて行くことで、少しずつ世界を変えて行くことが出来ると思います。

環境大臣賞：小学生部門

タイトル：【もったいないってなに？】

兵庫県 小学校6年生 盛 愛香

私は、「もったいない」という言葉の意味はよく分かりません。でも、この言葉を何気なく使っていました。

本当は、どのような意味があるのかを調べてみました。すると、「もったいない」とは、物の本来あるべき姿が無くなるのを惜しみ、嘆く気持ちを表している、日本の単語です。また、「もったいない」という言葉は、もともと不都合である、かたじけないなどの意味で使用されていたけど、現在では、それらから転じて、一般的に物の価値を十分に生かし切れておらず無駄になっている状態や、そのような状態にしてしまう行為を戒める意味で使われます。私はここまでくわしく言葉の意味を知りませんでした。軽く、「むだ」ってことかな？くらいでした。でも、改めて、きちんと調べてくわしく分かったのでよかったです。

実は、「もったいない」という言葉は、日本だけの言葉なのです。「無駄」とか「惜しい」とか、もったいないの一部の意味を翻訳する事は出来ても、「もったいない」に含まれる大きな意味を一語に変換する事は出来ないのだそうです。ある日、本屋さんで「MOTTAINAI」とローマ字で書いてある本がありました。これを見て、海外でも「もったいない」という言葉が使われているんだなと思いました。そこで調べてみると、アフリカの女性が世界中へ「もったいない」という言葉を広めたそうです。

そして、もったいないキャンペーンがスタートしました。そのもったいないという言葉には、「ゴミの削減」「再利用」「再資源化」「尊敬」という意味が込められています。最初はなぜ尊敬なのか分からなかったけど、親によく「お米を一粒でも残したら、百人の人が悲しむよ」と言われてきました。そこには、「感謝」と「尊敬」の気持ちを持つように、自然と教えられてきました。知らず知らずのうちに、「尊敬」の気持ちは大切にしていました。そして、地球や環境のために取り組むことは、とても良いことだと思います。

でも、最近エコという言葉が街中にあふれすぎて、エコが少し難しくなって来ているように感じます。私はいちいちエコという言葉を出さなくても、精いっぱいエコをがんばっていただきたいと思います。一人ひとり少しの努力で、地球のためになるならエコと口に出さなくても行動しようと思います。もしかしたら、「もったいない」と思う行動をしてしまう事があるかもしれませんが、そうした時は深く反省して、二度とくり返さないようにしたいです。

環境大臣賞：中学生部門

タイトル：【小さなことから】

静岡県 中学校2年生 平井 翔子

「牛ふん尿発電」太文字で書かれた新聞の見出しを見て、思わず私は吹き出した。「ふんと尿で発電？何だか臭くて汚そうだけど、本当に発電されるのだろうか？」そう思いながら記事を読み始めた。

酪農王国である富士宮市では、過剰に発生するふん尿による土壌や水の汚染が問題になっている。そこで、回収した大量のふん尿を発酵させ、その時に発生するメタンガスを使って発電するというプロジェクトが今秋始まるのだ。ふん尿によって出来た電力の一部は、下水道処理施設で利用される。そして同時に発生する消化液の浄化も行い、最後は液肥として牧草地に散布される。そこで育った草を再び牛が食べる。国はこのような循環型社会の構築のために、11億円もの事業費を負担するそうだ。

今まで使い道が無く捨てていたふん尿から電気を作り出すとは、なんてエコな試みなのだろう。それにしても11億円もの莫大な費用がかかるなんて驚きである。エコな取り組みは素晴らしいが、こんなにお金がかかるものなのだろうか。お金をかけずに私にもできることはないだろうか。

私はふと数週間前に穴の空いてしまった靴下のことを思い出した。履いていると指が穴にはさまって、とても気持ちが悪い。ゴミ箱に捨てようとしたら

「もったいないねえ。穴を縫ったらはけるよ。」と母が言った。確かに穴さえふさげばまだ充分に使える。私は自分で直してみたくなり一針一針丁寧に縫った。一応、穴はふさがったが見た目は悪いし、縫い目が指に当たって履き心地も悪い。でも、その靴下を履いて直した部分を見る度、何故だか幸せな気持ちになる。それは、丁寧に縫った事で愛着を感じるからだ。しかし、既に修理した部分に再び穴が空きそうだ。再び空いたら、今度は母が当て布をしてくれるそうだ。それでも、また空いてしまったらどうするのかと聞くと、

「最後は靴磨きに使うよ。」

と言った。そこまで使ったら、靴下の役目は終了だ。最後の最後まで使い切ったら靴下は嬉しいだろうし、私自身も嬉しい。

私は今回、靴下の修理をしてみて、物を大切にすることは良いことだと改めて思った。修理して使い続けることは、時間と手間がかかるが、エコにもつながるし、自分自身も幸せな気持ちになる。自分に出来るエコ活動はお金をかけなくても、どんなに小さなことでも良いと思う。私たち一人ひとりが意識していけば大きな力になるからだ。

地球子どもクラブ賞

タイトル：【「もったいない」は世界を救う】

茨城県 小学校6年生 奥山 陽向

「残さず食べなさい！もったいない」

ぼくは野菜があまり好きではない。食べようと思えば食べられるけど、嫌いな物は食べなくても他に食べるものはたくさんある。食べ物だけではない。じゃ口をひねれば水は出るし、ぼくたちの周りには、物であふれている。まだ使える物も汚れたり古くなると捨て、新しい物に買いかえる。欲しい物は、お店やインターネットでかん単に手に入る。便利で快適な生活が出来る一方で「もったいない」を忘れているような気がする。

母は決まって言う。「食べたくても食べられない国の人たちもいるんだよ」と。貧しい国の子ども達は、学校に行かずに働いて、働いてもその日食べるものさえ買えない。世界は五秒に一人の子どもが、食べ物が食べられなくて命を落としていると聞いた。どうして同じ地球に住んでいるのに、そんな生活をしている人がいるのだろう。

日本は食料がたくさんある国ではない。日本は、食べ物の半分以上は世界中から分けてもらっている。食べ物だけではない。石油や物の材料となる資源も世界中から分けてもらっている。

もしかしたら今日、食卓に並んでいる食べ物の中に、貧しい人たちの国から運ばれてきた物があるかもしれない。今日、ぼくの着ている服は、貧しい国の子ども達が学校にも行かず朝から晩まで働いて作った物かもしれない。ノートやえんぴつの中には、貧しさから森の木を切って作られた物があるかもしれない。ぼくたちの暮らしは貧しい国の人たちと無関係ではない。同じ地球の上に住む地球の仲間、地球人としてつながっていると気づいた。

残さず食べよう。ありがとうと感謝する。感謝の気持ちを持つと不思議ともったいないを無くして行こうという気持ちになる。食べ物は残さず食べる。物を大切にしてゴミを減らす。エネルギーを大切に使う。限られた資源をくり返し使う。「もったいない」の心がけが資源を未来までつなぎ世界を幸せにする。世界中の資源は、世界中のみんなの物です。自分や自分の国さえ良ければいいのではなく、みんなで分け合う、世界中が地球のために考えることが必要だと思います。

「もったいない」は外国語でも「MOTTAINAI」です。惜しいとかムダという一部の言葉は外国語にあっても、もったいないという大きな意味を持つ言葉は無いのだそうです。こんなすばらしい日本語があるのだから、ぼくたち日本から世界を変えていこう。世界中のみんなが幸せに暮らしていけるように。「もったいない」を一人ひとりが実せんすれば大きな力になるはず。出来ることをやらないなんてもったいないから。